

# 玉沢妙法華寺の三十番神について

荒 万里子

## 一、はじめに

日蓮宗における三十番神信仰は、法華経ならびに法華経の行者を守護するという性格付けをもって早くから受容され、近世では広く守護神信仰のひとつとして盛んに信奉されたことが知られている。

三十番神の表現形態には、主に絵像と木像とがあり、その法華守護神としての性格は、絵像に認められる讃文等の検討によって確かめられた<sup>1)</sup>。また、三十番神の奉安形態には、番神社・番神堂等と呼ばれる特定の堂宇に奉安される場合と寺院所有の他の堂宇に奉安される場合とがあり、その多くは寺院や地域の鎮守的性格を有していたことが明らかとなった<sup>2)</sup>。

本稿では、これまでの研究成果をふまえた上で、三十番神像造像の具体的事例として、静岡県玉沢妙法華寺に

所蔵される絵像と木像について考察を試みたい。同寺所蔵の絵像は、日蓮宗においては古絵像のひとつに数えられ、早くから大蔵卿の筆と伝えられてきた物で、神奈川県金沢文庫本と山梨県立正寺本の三十番神絵像<sup>3)</sup>との類似点が認められ、一方の木像は、本絵像を模倣して立体化した可能性が強いなど、注目する点が多い。これら諸事例を比較・検討することで、同寺の三十番神像について、その像容の特質ならびに造像の背景を明らかにしてゆきたい。

## 二、玉沢妙法華寺について

玉沢妙法華寺は、六老僧の弁阿闍梨日昭が弘安七年（二二八四）に開創した寺で、創建当時は鎌倉の浜土にあり、法華寺と号した。その後、天文七年（一五三八）に上杉氏と北条氏の兵乱を避けて鎌倉から移転し、越後

の村田、伊豆の加殿の地を経て、元和七年（一六二一）、今日の玉沢の地に再建された。この移転事業に尽力したのが、一四世の聖雲院日苞（一五四四〜一六〇九）、一五世の良応院日産（一五六八〜一六二二）であり、玉沢での伽藍整備に奔走したのが第一六世真応院日達（一六二二）、第一七世円通院日亮（一六四六）である。養珠院お方の方、英勝院お勝の方、徳川頼宣、徳川頼房、太田道顕、三浦為春らが檀那となり、巨額の浄財を寄せたのもこの時といわれる。

当時の建造物は一八間四面の大本堂、大中鐘楼、五重塔、経蔵、三光堂、祖師堂、大客殿、大中書院、大小庫裡からなり、周囲に二四の塔頭寺院を整えた、雄大壮麗の寺観を誇っていたといわれる。その後、寛政三年（一七九一）の大火でそのほとんどが焼失したが、俳僧一瓢の名で知られる四一世境修院日恒（一八四〇）の代に再建された。





その後の同寺の伽藍配置の変遷については定かではないが、同寺に所蔵される安政六年（一八五九）年の「豆州田方郡玉沢経王山妙法華寺境内絵図」によれば、本堂・鐘楼・経蔵・奥之院・祖師堂・客殿・書院などがみえ、五重塔は失われているものの、本堂の右手、奥之院手前

に「番神社」なる建造物を確認できる。

### 三、絹本着色三十番神絵像について

妙法華寺には三十番神の古絵像一幅が所蔵される。本像は、同寺三三世境持院日通の『玉沢手鑑草稿』に「一、番神絵像 大藏筆 皆立形 一々銘宗祖御筆」と記載されている。この記録から、一八世紀後半には、本絵像は既に同寺に蔵され、大藏卿の作として認められていたことが明らかである。

大藏卿は、所伝では相模国の南部地方の人で、鎌倉時代末頃の絵師といわれ、小田原浄永寺、京都要法寺、玉沢妙法華寺の日蓮聖人画像、沼津妙海寺の天照八幡図、中山法華経寺の絵像本尊、玉沢妙法華寺の宝塔絵図などの作者であることが、諸々の古記録に記されている。しかし、襲名などの理由も考えられるため、これらの作者がすべて同一人物であるか否かは未詳である。

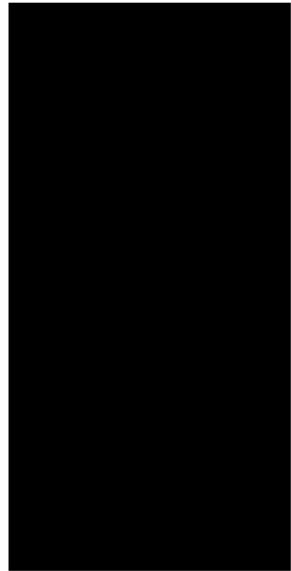
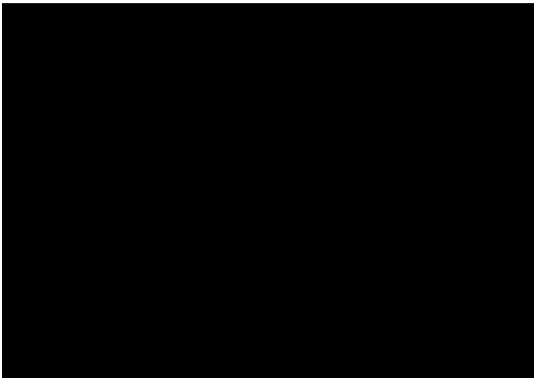
妙法華寺所蔵の本絵像は、絹本着色で、本紙の寸法は、縦六七・五cm×横三四・二cmになる。表具裏書きに「（絵カ）（像カ）三十番（番カ）神 神名御（真カ）の銘が記されている。製作年次は未詳であるが、作風・形状など美術史上の観点から室町後期の作と推定され

る〔写真1〕<sup>10)</sup>。

描かれた神像はいずれも立像で、配置を示すと〔図1〕の通りである。本像は上段中央に一五日の春日が御正体の鹿で描かれ、その右に一二日の賀茂が雷神姿で、左に九日の貴船が風神姿で描かれるという特徴的形状を有する。殊に、春日を鹿・榊・鏡という御正体で象徴的に描画されている点は、興味深い。

二段目が、右から諏訪・伊勢・住吉・吉備の四神、三段目が、右から小比叡・北野・熱田・八幡・氣多・苗鹿の六神、四段目が、右から平野・江文・大比叡・客人・大原・松尾の六神、五段目が、右から三上・聖真子・広田・祇園・氣比・八王子の六神、六段目が、右から赤山・建部・鹿島・稻荷・兵主の五神の配列となっている。

日蓮宗の諸寺に伝わる三十番神の絵像は、天照神・八幡神を最上段に配置する事例が多く、その配列も五神六段形式あるいは六神五段形式で作画されている場合が一般的であるが、本像は形式が異なるもう一つの事例として注目に値する。春日神を主体とする独特の勧請形式は、法華経寺・立正寺・妙法華寺の三本の絵像に共通して認められることから、日蓮宗寺院では、天照・八幡を中心に据えた勧請形態を有する三十番神絵像と、春日を中心



〈写真1〉玉沢妙法華蔵絹本着色三十番神絵像

〔圖1〕妙法華寺本構成図

貴船9 風神・劍	春日15 鹿・柳・鏡	賀茂12 雷神		諏訪2 直衣	小比叡18 僧形	平野16 束帶	三上27 束帶	赤山25 武官束帶・弓矢
		伊勢10 束帶	北野7 束帶	熱田1 唐裝束	大比叡17 僧形・扠子	江文8 女神・琵琶	聖真子19 僧形	建部26 束帶
住吉23 翁	八幡11 僧形・錫杖	氣多5 狩杖衣	客人20 女神・団扇	大原14 束帶	祇園24 牛頭天王	鹿島6 甲冑姿・弓	稻荷22 女神・劍・宝珠	
苗鹿29 束帶	松尾13 狩衣・袈裟	大原14 束帶	氣比4 直衣	八王子21 束帶	兵主28 武官束帶・弓矢			

※ 算用数字は結番日

『玉沢手鑑草稿』「番神絵像」(『日蓮宗宗学全書』一九卷二九一頁)

一番神絵像

大藏筆 皆立形  
一々銘宗祖御筆

十二日 雷神 賀茂	二日 諏訪	十三日 僧形 松尾	十六日 平野	廿七日 三上	廿五日 赤山
十五日 鏡白鹿	十五日 束帶 伊勢	七日 北野	八日 江文 女形	十九日 僧形 小比叡	廿六日 建部
春日 鏡	廿三日 道形 住吉	十一日 僧形 八幡	十七日 僧形 大比叡	三日 広田	廿四日 甲冑
六日 風神 貴船	廿日 吉備	五日 氣多 苗鹿	十四日 大原 聖真子 白衣袈裟	四日 氣比 八王子	廿二日 女形 稻荷
					廿八日 兵主

に据えた三十番神絵像とが存在していたことがわかる。<sup>1)</sup>

また、本絵像において特筆すべき点は、その寸法・形状から、一々の神像の配列、装束・持物など像容に至るまで、かつて考察した室町時代（一四世紀初頭）の作と推定される神奈川県称名寺金沢文庫蔵の三十番神絵像、一六世紀後半以前の作と推定される山梨県立正寺蔵の三十番神絵像と非常に似通っている点である。<sup>2)</sup> これら三本にみられる唯一の相違点は、三上神が称名寺本・立正寺本ともに直衣姿で描かれるのに対して、妙法華寺本は東帯姿で描かれていることである（図2）。

妙法華寺の三十番神絵像は、その形状や製作年代から、金沢文庫本や中山法華経寺本との相関性が指摘され、また立正寺本との関係も推測されるわけである。このことから妙法華寺の三十番神絵像は、法華寺が鎌倉浜土にあった当時に作成されていたものであると推定することも可能である。

#### 四、木造三十番神立像について

妙法華寺には、前述の絵像とは別に三十番神の木造立像が所蔵され、随人二体を含む一六体が現存する。三十番神は一四体、すなわち二日諏訪、三日広田、四日気比、

〔図2〕称名寺本・立正寺本構成図

貴船9 風神 剣		春日15 鹿・柳・鏡		賀茂12 雷神	
住吉23 翁	吉備30 直衣	伊勢10 東帯	諏訪2 直衣	北野7 東帯	小比叡18 僧形
気多5 狩衣	苗鹿29 東帯	八幡11 僧形 錫杖	熱田1 唐装束 私子	江文8 女神	平野16 東帯
大原14 東帯	松尾13 狩衣 袈裟	客人20 女神 団扇	大比叡17 僧形	聖真子19 僧形	三上27 直衣
氣比4 直衣	八王子21 東帯	祇園24 牛頭天	広田3 東帯	建部26 東帯	赤山25 武官 弓矢
稲荷22 女神	兵主28 武官 弓矢	鹿島6 甲冑姿 弓矢			

※ 赤山・兵主の下に隨身二軀あり  
※ 算用数字は結番日

五日気多、七日北野、一〇日伊勢、一二日賀茂、一三日松尾、一五日春日、一六日平野、二一日八王子、二五日赤山、二六日建部、二七日三上が蔵されている。

すべての神像には玉眼がはめ込まれ、彩色は本体が黒塗り、持物に金箔が塗られている。かつて彩色が施されていたか否かは、現状では明確ではない。

このうち、七日の北野大明神の像高は一七・五cm、一五日の春日大明神は像高二四・〇cmである。春日は鏡と榊の総高で計測したため例外であるが、他の神像の平均的像高は一七〜一八cmであったものと推定される。

特徴的なのは、同寺所蔵の絹本着色三十番神絵像を模倣したと思えない、その像容にある。いま、一四体の木像の像容を示すと次のようになる。なお、( )内は絵像中において該当する神像の像容である。

諏訪…烏帽子・直衣・笏  
(烏帽子・直衣)

広田…垂纓冠・束帯・笏・太刀  
(垂纓冠・束帯・太刀)

気比…垂纓冠・束帯・笏・太刀  
(烏帽子・直衣)

気多…烏帽子・直衣  
(烏帽子・狩衣)

北野…垂纓冠・束帯・笏・太刀  
(垂纓冠・束帯・太刀)

伊勢…垂纓冠・束帯・笏・太刀  
(垂纓冠・束帯・太刀)

賀茂…雷神  
(雷神)

松尾…烏帽子・狩衣  
(狩衣・袈裟)

春日…鹿・榊・鏡  
(鹿・榊・鏡)

平野…垂纓冠・束帯・太刀  
(垂纓冠・束帯・笏・太刀)

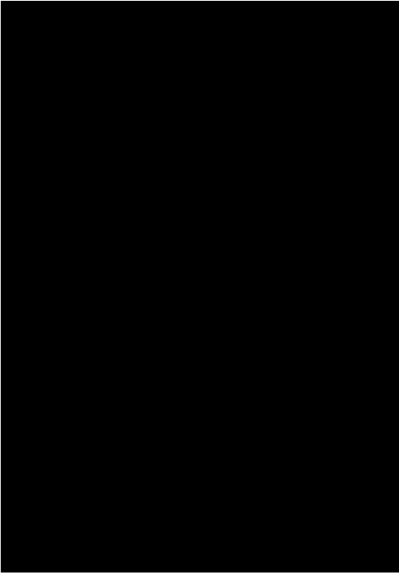
八王子…垂纓冠・束帯・笏・太刀  
(垂纓冠・束帯・笏・太刀)

赤山…卷纓冠・束帯・太刀・弓  
(卷纓冠・束帯・太刀・弓)

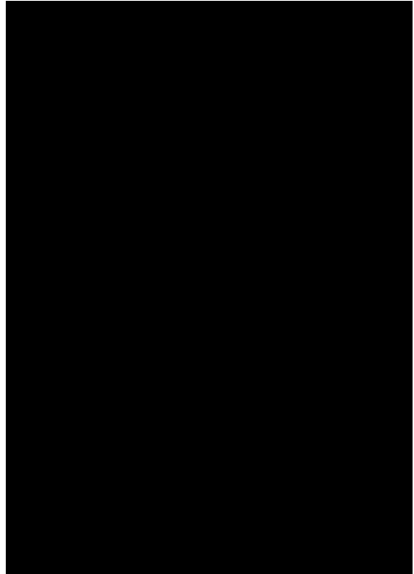
建部…垂纓冠・束帯・笏・太刀  
(垂纓冠・束帯・笏・太刀)

三上…垂纓冠・束帯・笏・太刀  
(垂纓冠・束帯・笏・太刀)

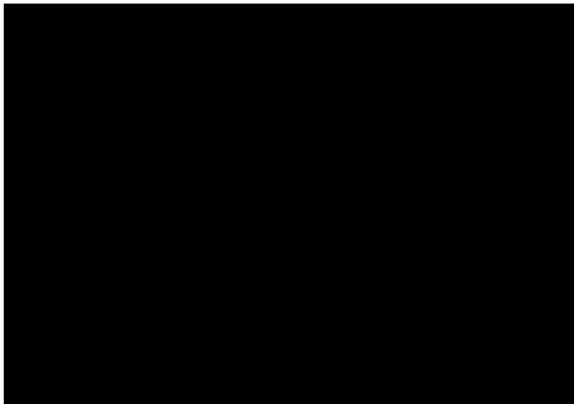
これによれば、気比(束帯と直衣)・気多(直衣と狩衣)・松尾(袈裟を着用)の像容が若干異なる以外は、絵像・木像ともに多くの共通項を見いだせ、容姿・容貌、装束から持物に至るまで、完璧なまでに緻密に再現されているのである。特に春日などは、他に類を見ない御正体の鹿そのままの木彫となっており(写真?)、賀茂も



〈写真2〉春日大明神像



〈写真3〉賀茂大明神像



赤山大明神像

気比大明神像

諏訪大明神像

雷神の姿で絵像のままに表現されている（写真3）。このことから、本木像は、絵像が先にあって、これを模倣するかたちで造像された可能性が高いのである。

次に本像の造立に関わったと思われる人物について考察する。本像には、すべての神像の台座裏に墨書があり、それぞれに「蓮華院日心造立」あるいは「蓮華院妙紹日心大師造立」の記載がみえる。これは、養珠院お万の方の法号であることが知られ、養珠院が本像の造立に深く関与したことが読みとれる。

また、氣多大明神の台座裏に、

慶長十四年<sup>西</sup>

十二月二十八日 十四世

日産 再修飾主

四十二世日宸（花押）

天保六<sup>乙未</sup>年

六月吉祥日

の墨書がみえ、他の台座にもほぼ同様の記述が認められた。これによれば、慶長一四年（一六〇九）一二月二八日に日産によって本像一具が開眼されたこと、また天保六年（一八三五）に四二世の境用院日宸（一八三五）によって本像が修復されたことなどが読みとれる。因み

に日宸は天保六年（一八三五）六月二日に遷化するが、一〇日伊勢および随人の台座裏には「天保六<sup>乙未</sup>年 六月十五日開眼者也」との記載がみえ、一部の神像（もしくは全神像）は日宸の遷化後に修復開眼がなされたことがわかる。

##### 五、妙法華寺の番神信仰

妙法華寺には、三三世境持院日通（一七〇二〜一七七六）が、その晩年に妙法華寺の縁由を諸記録によって筆録・編纂した『玉沢手鑑草稿』が伝存する。本書の記述によると、次に紹介するように、一五世日産の代に伊豆加殿の地に番神堂が建立されていたことが知られる。

一番神堂 日産師代立<sup>三</sup>賀殿、施主御万様、開眼  
産師、有<sup>二</sup>棟 札 奇異之文言有<sup>レ</sup>之、必見、日  
迅師代再興

一同拜殿 同時二立、施主御勝様

一社壇 施主紀州頼信卿

一額 番神宮 日允之筆

一石壇 日迅師代

其外如什物帳<sup>13</sup>

番神堂の施主は養珠院お万の方で、拜殿の施主は英勝



院お勝の方、日産は番神堂に奉安する三十番神像の開眼を行っている。また、番神堂は、その後、何らかの理由で喪失し、二世通猛院日迅（一六八七）によって今の玉沢の地に再建されたことが読みとれる。

同書によれば、この番神堂には棟札があり、「奇異の文言」が記されているというが、これについては、徳川頼信の願文で日産の筆になる「番神宮棟札御願状」に詳しい。

番神宮棟札御願状頼信卿八歳之時也

右神社一字建立事、先願四海齊平、万邦安泰、天下得<sub>レ</sub>豊盛之慶<sub>一</sub>、国土無<sub>レ</sub>兵革之憂<sub>一</sub>、仁臣<sub>レ</sub>販<sub>レ</sub>三千幕下<sub>一</sub>、更冀本<sub>レ</sub>弘惠日高照<sub>一</sub>邦城<sub>一</sub>、迹<sub>レ</sub>靈和光永耀<sub>一</sub>家門<sub>一</sub>、并予身心堅固病患悉除、四時永無<sub>一</sub>一点災<sub>一</sub>、百季常有<sub>一</sub>大来吉<sub>一</sub>云<sub>レ</sub>爾

慶長第十四<sub>二</sub>西十二月廿八日 常陸介源頼信<sub>白</sub>

昭門一十四世

日 産在判

本書によれば、日産によって番神堂が再建されたのは、慶長一四年（一六〇九）二月二十八日のことであり、これは徳川頼宣八歳の時であり、養珠院お万の方の計らいで頼宣の出世開運と、武運長久、子孫繁栄を祈ったこと

がわかる。

なお、番神堂落慶の慶長一四年（一六〇九）二月二十八日は、先述した同寺所蔵の木造三十番神立像の開眼の年次と同一であるところから、加殿の番神堂には当初木造三十番神立像が奉安されたことが推測できる。

その後、同寺の玉沢移転にもなつて、番神堂も移転されたことは、前掲の「豆州田方郡玉沢経王山妙法華寺境内絵図」によっても知ることができ、江戸後期までの存在が確認されている。

また、『玉沢手鑑草稿』<sup>15</sup>には、同寺において一月一日、五月一日、九月一日に番神祭が施行されており、国家安泰を祈願していたことが記録されている。同寺における三十番神信仰の性格を知ることの出来る貴重な資料のひとつである。

## 六、むすびにかえて

本稿の考察により、玉沢妙法華寺における三十番神信仰の成立は、伊豆加殿の地に番神堂が建立される以前に遡る可能性が考えられる。それは、養珠院お万の方が仏師に命じて造らせ、加殿の番神堂に奉安された木造三十番神立像が、同寺に伝わる絹本着色三十番神絵像を完璧

なまでに模倣して、その立体化を試みている点からも明らかである。これは仮説の域を出ない推論であるが、かつて鎌倉浜土に同寺が所在したとき、「大蔵」と名乗る絵仏師によって金沢称名寺本や中山法華経寺本に非常に類似した絵像が作成され、その後、本絵像は伊豆加殿の地に伝わり、木造立像として造像されたとも考えられるのである。

このように、同寺におけるその後の三十番神信仰の展開は、養珠院お方の方の法華経信仰と深く関係していたことを知り得た。特に、同寺所蔵の木造三十番神立像および番神社については、養珠院の實子にあたる徳川頼宣の武運長久・子孫繁栄などの所願成就のために造立されたことが読みとれる。これらの事実、養珠院の法華経信仰の一面を示す事例として興味深い。

また、今回の考察で明らかになった通り、本像は、春日を最上段中央に配し、左右に風神・雷神の貴船・賀茂を、下に天照・八幡をそれぞれ配する点が特徴的である。これによって、日蓮宗の諸寺に伝わるものでは、天照・八幡を中心に据えた勸請形態を有する三十番神絵像と、春日を中心に据えた三十番神絵像とが併在しており、この点は今後の絵像研究にひとつの指針と方向性を示唆し

てくれるものと考ええる。

#### 註

(1) 荒万里子稿「日蓮宗の三十番神信仰について―三十番神絵像を中心に―」（『日蓮教学研究所紀要』一三三号所収）、  
「日蓮宗の三十番神信仰について―三十番神絵像の「讃文」を中心に―」（『日蓮教学研究所紀要』二四号所収）。

(2) 荒万里子稿「日蓮宗における三十番神信仰の地域的展開―武蔵国・相模国について―」（『日蓮教学研究所紀要』二五号所収）。

(3) 荒万里子稿「三十番神の像容に関する一考察」（『立正大学大学院仏教学論集』二三号所収）。

(4) 日苞（一五四四〜一六〇九）は、池上本門寺一二世日愷の弟子であった。文禄二年（一五九三）妙法華寺一三世日南の附弟となり、妙法華寺一四世となる。その頃、妙法華寺は越後村田の妙法寺に非難していたので、文禄三年（一五九四）、日苞は日南と相談の上、静岡県田方郡に移転することを企て、妙法華寺及び塔中寺院等を再建した。鎌倉には大坊の実相院のみを残置し、沼津妙覚寺、三島妙行寺から預け置いた寺宝などを帰納せしめた。慶長八年（一六〇三）職を日産に譲り、雲金の妙本寺に引退した。なお、玉沢の歴世は日蓮聖人を初代に数えなければ、それぞれ一代ずつ繰り上がる。従って、記録によっては日苞は一三世

となつてゐる場合もある。

- (5) 日産(一五六八〜一六一二)は、徳川家康の側室養珠院の甥と伝えられ、日苞と同じく池上日擘の弟子であった。慶長八年(一六〇三)日苞より譲られて、妙法華寺第一五世の貫首となつた。当時、妙法華寺は伊豆田方郡加殿村にあったが、玉沢に移転するため大木澤(玉沢の旧名)近郷一三カ村の庄屋役人の説得に成功した。しかし、慶長法難を前後したために堂宇を建立するに至らず、近くの雲金妙本寺に隠居したが、功により玉沢中興第二祖に数えられる。
- (6) 養珠院お万の方(一五七七〜一六五三、一説一五八〇〜一六五三)。徳川家康の側室で、紀州(紀伊)徳川家の祖頼宣、水戸徳川家の祖頼房の生母、徳川光圀には祖母にあたる。はじめ蓮華院という法号で、元和二年(一六一六)家康が没すと養珠院と号した。日蓮宗の熱心な信徒で徳川時代初期の大外護者であり、その功績は著しいものがある。
- (7) 『日蓮宗事典』「妙法華寺」の項。なお玉沢妙法華寺の展開については、池谷真敬稿「伊豆国三島における日蓮教団の展開―日昭門流の進出と玉沢妙法華寺―」(『立正大学大学院仏教学論集』二三号所収)に詳しい。
- (8) 『日蓮宗宗学全書』一九卷二九二頁。本書には「大蔵筆 皆立形 一々銘宗祖後筆」と記述され、本像は「大蔵」と名乗る絵仏師の作で、神像は立像形式、神名の記載は日蓮聖人の筆になると伝えられる。また、絵像の配列が明記され、各神像の名称、結番の日付、僧形・女形・道形など

の形状が記録されている。

- (9) 坂輪宣敬稿「日蓮聖人画像の作者大蔵について」(『宗教研究』二一〇号所収)
- (10) 調査に同行した佐伯英里子氏の指摘による。
- (11) 荒万里子稿「日蓮宗の三十番神信仰について―三十番神絵像を中心に―」(前掲書)、「三十番神の像容に関する一考察」(前掲書)。
- (12) 佐伯英里子稿「金沢文庫保管称名寺蔵「三十番神絵像」考」(『仏教芸術』二四三号所収)を参照。氏は中山法華経寺本もこれら三本と同型式の絵像であることを指摘する。
- (13) 『日蓮宗宗学全書』一九卷二八四頁。
- (14) 同、一九卷三〇二頁。
- (15) 同、一九卷三一四・三一六・三二七頁。